

空



2012・12

SORA 46号

床柱

柴田 佐知子

朝顔の窓あけて父起しけり

耳遠き父に声張る秋日和

蠅螂の顔傾けて考ふる

今生の端に父臥す夕月夜

病人の聲となる父椿の実

鶏頭や介護に日々を費やして

父いよよ平たく病みぬ秋夕焼

病む父が目で応へをり秋日和

真夜中や介護の父に毛布足す
ぎりぎりの余命に秋の澄みにけり
引き潮に乗りて燕の帰りけり
一と夜置く屍に銀河曲りけり
秋の日や棺は平らに運ばるる
碧空を乱さずに鷹渡りけり
水のごと念仏流れ萩の寺
帰り花寺の柄杓は寺を出ず
北に置く父の遺骨や冬銀河
眠られぬ枕の中も雪が降る
支へつつ父を柚子湯に浸せしこと
底なしの深さに真夜の水餅は
父と世を違へて冬の床柱

青空

高倉和子

曼珠沙華棒立ちのまま枯れてをり

地芝居のよよと崩るる男かな

団栗を拾ひてもまた持て余す

病室に運動会のプログラム

母の指伸ばして洗ふ秋の昼

ぼつかりと青空のある刈田かな

田仕舞ひの煙にゆるむ山の色

あたたかき川原の石や文化の日

三つ咲きて

中田みなみ

返り花人待つ門にほころびぬ

返り花小花模様の杖とめて

三つ咲きて忘れられゆく返り花

山茶花の赤と消えたる生家かな

寺の門凍て極まりてぎいと鳴る

それぞれに苦悩のかたち蓮枯れし

白息を棒のごとくに経るる

事故跡やシグナルの赤冴えて憑く

一瞥

荒井千佐代

蛇穴へ入る前われを一瞥す

死に顔にしばらく月の射しをりぬ

レコードに針を置く音冬銀河

柚子熟れて持て余したる己が相さが

長崎の坂また坂や寒波来

全て断つ修道院や蔦枯れて

毛糸玉も母も日暮れてゐたりけり

罪深き日の寒紅を拭き取りぬ

苦瓜

服部早苗

愁思かな廊下の隅の船箆笥

ともしびのもれて苦瓜熟しけり

あちらよりこちらの冥し女郎花

無花果食べて蛮声の鴉かな

うぶすなによるづの木の実宮参り

独白のひとつこぼるる花野みち

尋めゆくは物狂ひめく鳥瓜

鶉の声醒めぎはの夢真二つに

柿熟るる
柴田志津子

近道
だいじみどり

青々と帰燕の空のあるばかり

積み上げし本へ置かれし新暦

死火山のふもと明るし花すすき

泡盛は匂ふにとどめたる上布

干草を掻き乱しをり放ち鶏

素つぴんをひたに匿せるマスクかな

乱心の刃を高く菊人形

ちよつと見て又ちよつと見てけふの月

動かねば鋼の如き秋の蛇

稲を干す棒の疲れてをりにけり

退屈な下駄屋のあるじ柿熟るる

近道の広き境内小鳥くる

秋澄むや新車を祓ふ大社

洗髪逆立つほどはなかりけり

目が合へば目つむる猫や帰り花

重箱の蓋の金文字放生会

阿蘇

野上

はるか
杏

裏阿蘇の風となりたる流れ星

阿蘇湧水豊年の甘さと匂ひ

本殿の斜めうしろの模櫃の実

大屋根に日の移りゆく紅葉かな

はるかまで風のかたちの薄原

寒玉子ずしりと重し阿蘇の闇

山音に膝寄せ合へり牡丹鍋

音ひとつ無き阿蘇二十三夜月

熊本 松田 明子

籠と餌もらひ鈴虫飼ふことに
鈴虫に仕ふるごとく飼ひにけり
鈴虫の髭に力の見えてきし
鈴虫を気ままに鳴かす闇のあり
獺禁忌庭に文机向けにけり

福岡 栗原 京子

長老の一喝神輿の道開く
神々はざんばら髪や里神楽
熱病のやうな足取り里神楽
秋の日や鶏追ひまはす犬のみて
猫老いて喋り出しさうなる月夜

糸田 宮井 知英

鶏頭花命かけたる恋知らず
秋土用蛇口の水の素気なし
金糸魚の刺繡のやうな筋目かな
橋脚の残る廢線小鳥来る
猪鬣はいつも空つぽ秋茄子

糸島 小林 朱夏

泣きやまぬ妹憎し葉鶏頭
切株に腰掛けて見る里神楽
母の居るところが故郷青木の実
真つ当に生き小指切る俎始
大寒や黒に徹して鴉鳴く

福岡 矢野百合子

運動会子は巻寿司の端が好き

月光に砲台跡の口開く

鯉跳ねて己が輪に入る秋の暮

澄む水に火の色流す百の稚魚

身に入むや佇むのみに扉開く

吉井 高倉恵美子

死にたい日死にたくない日秋の空

連山の裾の夕映え秋気満つ

物売りの通らなくなり豊の秋

猪よりも大きな犬や冬に入る

次の世は夫看取りたし花八つ手

福岡 あさなが捷

一面の芒野阿蘇は動かざる

舞ふはみな村の男ぞ夜の神楽

山茶花のむかうに雲の流れけり

身のうちに暗き淵あり雪をんな

寒鰯の大俎に納まらず

福岡 山内 碧

青空を従へ银杏黄葉かな

川は水たつぷり湛へ稲の秋

田の神を押しやる勢ひコンバイン

粃殻の小さき山の光かな

宝物のごと仏壇に桃を置く

空作品評

柴田佐知子

全て断つ修道院や蔦枯れて

荒井千佐代

キリスト教の修道士たちが共同生活を営む修道院。清貧・貞節・従順の誓願を立てた人々の祈りの場である。私は清浄・厳正・孤高といった印象をもち立ち入るを許されざる場所というイメージをもっている。「全て断つ」という短い措辞が、修道院の景観から、その内に暮らす修道士の精神世界までも感じさせる。省略の極致の鮮やかさに感服した。

裏阿蘇の風となりたる流れ星

野上 杏

以前、阿蘇に星を見に行ったことがある。街中とは異なりそこは人工的な光がないので、星の数が違う。夜空が星に埋め尽くされており、星座表を開いても、私はさっぱりわからなかった。

裏阿蘇に立つ作者に星が流れる。星空の下は阿蘇の闊の大地なのであろう。「風となりたる」という断定がダイナミックだ。

鈴虫に仕ふるごとく飼ひにけり

松田 明子

鈴虫の鳴かざる昼を熟睡す

吉村 摂護

一句目、声を楽しむために飼った鈴虫だったはずなのだが、鈴虫の餌を足し、野菜を入れ替える。「仕ふるごとく」：生き物を飼うということはこのようなものかもしれない。うまく言いとめている。

二句目、美しい鈴虫の声も増えると、夜の家が震えるほどの声となる。喧しいのである。鳴りをひそめる昼間に「熟睡す」によつて、夜は眠れないほどの鳴声であることがわかる。鈴虫を飼うことで句を頂戴したお二人、どうぞ鈴虫に仕えてください。

泣きやまぬ妹憎し葉鶏頭

小林 朱夏

子守唄のような調べと「妹憎し」が面白い。子供の背丈を越える赤い葉鶏頭との取合せも、懐かしい風情がある。朱夏さんの句の毎日俳句準大賞受賞が決まったそうだ。自在なる詠みぶり、いよいよ好調である。

次の世は夫看取りたし花八つ手 高倉恵美子

ご主人の看病を受けておられるのだろうか。切ない内容である。目を逸らさず作品化される姿勢に打たれる。地味な「花八つ手」がしみじみとした風情を醸している。(以下略)

空集

柴田佐知子選

かりがねや聖堂を出て十字切る
団栗をこぼして母へ駈け寄りぬ

須恵 長 節子

星空を振り捨ててゆく流れ星

雨粒のはじめはまばら曼珠沙華 兵庫 戸栗 末廣

明日の気を槍鶏頭の朱に貫ふ

枯蝟螂ぎいとこちらへ向きにけり

滴れる山の後は知らぬまま

橋の灯に集つて来し夜の霧

片蔭に佇ちて見送る霊柩車

山巔の翳りてきたる晚稻刈

櫛の花昔男は寡黙なり

どの汽車も線路に眠り天の川

髪切つてくるる嫁みて夕桜

菊人形仇打つ刃高きまま

全身を茎にあづけて大豆引く

粕屋 吉田 葎

サイレンがサイレンを追ふ夜の火事

一人相撲必ず神の勝ちたまふ

身に入むや湖底の村へ鳶の笛 千葉 原 友子

燈火親し記紀の神々生き生きと

気兼ねせる紫苑の色かとも思ふ

葉鶏頭生家の梁のむき出しに

当人のほかはにこにこ七五三

ご近所のごとは筒抜け花南瓜

秋高し放流の稚魚滑り出て

蠟燭を部屋の中へ颯風圈

葛の花唾のつまりし汽笛過ぎ

貨車一つづつ離されて月の夜

未成りの瓜も火に焦げ蔓たぐり

浜風に八旗なびく放生会

福岡 矢野百合子